にその忠義を賞し、繩を解いてゆるしてやつたのみならず、澤山の俸給を與へて親切に使つてやつた。

今までは、たゞシーザーを武勇に優れた勇士とのみ思つて居たホムペイの將士は、此の寛大な心と情に厚い行とに感じて、それからは生命を惜しまずに働らいた。

八〇 牛蒡狩の獲物

備前の池田光政は、賢明な人であつた。此の光政がまだ十四五歳の時のこと、京都の所司代板倉伊賀守勝重に、民を治める道をたづねた。勝重は、

「私は訴訟の裁きばかりをやつて居る者でありますから、殘念ながら、國を治める道などは一向に存じませぬ。」

と答へたが、光政は更に、

「所司代として聞え高き御身が、何かお考へのない筈はございますまいぬ。どうかお漏し下さい。」

と再びたづねた。勝重は、

「では申し上げます。國を治めるには、角な箱に味噌を入れて、丸い杓子で取るやうになさればよろしいかと思ひます。」

と答へた。

「それは如何なるわけでございまする。」

と光政は訊いた。

「國事は寛でなければ、人心を得がたいものであります。國中の隅々までも、罫を劃したやうに治めようとすれば、大國の政治は出來るものでありません。」

と勝重は注意を與へた。

賢明な光政は、此の一言に深く感じて、常に臣を愛し、民をいたはることを忘れなかつた。

ある時、鷹狩の途中で食事をした。すると、其の食物の中に砂が交つて居たので、光政は不興の色を面にあらはし、料理人をよんで叱責した。料理人は憚る所なく、

「食物に砂が雜つて居る筈ではございますまいぬ。今日は風が強うございましたから、お口に砂が吹き入つたものと存じます。」

と申上げた。光政は急に言葉を和げて、

「なるほどお前の云ふ所は道理である。これは予が過であつた。」
と云はれた。
歸館すると、青地三之丞と云ふ臣が、
「今日の牛蒡狩の獲物は如何でございました。」
と伺つたので、光政は怪しんで、
「牛蒡狩とは何のことだ。」
とたづねられた。三之丞は、
「此の前の鷹狩の時に、當直の者は定めて疲れたであらう。其の代り今日の獲物を吸物にしてやらうと仰せられましたので、一同はありがたく存じて居りましたが、其の日の吸物は牛蒡ばかりでしたから、みな鷹狩のことを牛蒡狩と申して居ります。」
と言ふ。光政は笑つて、
「それは氣の毒なことをした。」
と直に料理人を呼び出し、其の日は雁の吸物を當直の士に賜はつた。

八一 海舟の逸話一つ

安政の秋である。傳習生の勝海舟は、小さい舟に乘つて、一つの航海を試みたいと思ひ、ある日、そのことをオランダの教師に話した。教師は、
「秋の天は變はりやすいから、風でも出たら大變です。まだあなた方の腕前では、風に出あつた時に、それを凌いで乘り切ることは出來ない。秋がすぎてからにした方がよからう。」
と云つたが、海舟は、どうかして乘出して見たいと思つた。
「私どもは海軍に從事する者ですから、海で死ぬ位の覺悟をして居ないと修業になりません。是非やつて下さい。」
と再び願つたので、教師は、
「それではやつてごらんなさい。しかし陸から十里以内のところにしなさい。」
と注意を與へて呉れた。
海舟は十二三名の者と一しよに、コットル型の小船に帆をあげ、長崎から五島の方へ向けて

舟を出した。

最初は風向もよく、舟は眞一文字に進んで行つたが、その中に黑雲が出て來て、瞬く中に空一ぱいに擴がり、雷鳴と共に大雨が降り出し、舟は木の葉のやうに搖れた、一同は、どうかして陸の方に舟をつけようとあせつたが、却つて沖の方へ押し流されるばかりであつた。その中に舟は二度も暗礁の上に乘り上げ、船側の穴からは水が次第に流れ込んだ。

海舟は、此の時に大聲をあげて、

「敎師の命を用ひず、諸君をこゝに連れ出し、危險に陷らしめて何とも申しわけがない。私はもう死を決した。生きるか死ぬるか、諸君もやれるだけやつてくれたまへ。」

と叫んだ。此の聲をきいて、一同は勇氣百倍し、非常な力を出したので、船は暗礁を離れた。漸く肥前の灣內に逃げ込んで命を全うした。

海舟は、あとで此のことを話して、敎師に詫びた。敎師は、

「學問は知つて居ても、ほんたうに危險な場合に逢はないとわからぬものです。一度危險に逢つて、其の場合を味はつた人は、それから先のことは自然にわかるものです。今日から舟のことはあなたに任せます。」

と云つた。

八二　中江藤樹

孝心ふかき中江藤樹先生は、二十七歳の時まで、伊豫の國の大洲侯に仕へて居たが、故郷にある老母のことを思ふあまりに、官をすてゝ近江國高島郡小川村に歸り、朝夕田畑を耕して、母に孝養をつくし、暇ある時には、近所の人々に道を說いた。鄕黨の者は、藤樹の德になつき、近江聖人と唱へて尊敬した。

○

ある時、一人の武士が駕籠に乘つた。坂本といふところの旅舍に着いてから、はじめて氣がついて見ると、二百兩ばかりはいつて居た胴卷がない。さてはあの駕籠の中に忘れて來たのか。しまつたことをしたと思つたが、もうとり返しがつかない。がつかりして居ると、しばらくたつてから、空駕籠をかついで雲助が引つ返して來て金を屆けてくれた。武士は、喜んで胴卷の中から十六兩ほどの金をとり出し、

「わざわざ届けてくれたお禮のしるしだ。とつてくれ。」
と云つて渡したが、雲助たちは、
「私どもはお返しすればそれで氣がすみます。そのやうに澤山のお金を貰ふわけがありません。」
と云つて手にもふれない。
「せめて此の半分だけなりととつてくれ。」
と武士がすゝめると、雲助たちは、
「それでは、一里ほど引つ返して來た駄賃として、二百文だけ頂きませう。それより餘計にいたゞくと心を欺くことになりますから……」
と云ふ。武士は此の雲助たちの立派な行に感心して、
「今の世の中に珍らしいよい心がけぢや。それにしても、お前たちは、どうしてそのやうに美しい心がけになつたのか」
とたづねた。雲助は、
「中江藤樹先生を駕籠に乘せて行きながら、ありがたい敎をきゝ、正直に稼ぐといふことを誓ひました。とつてならぬ金をとれば不正直ですから、心を欺くことになります。」

と申し立てた。武士は雲助たちが歸つてから、中江藤樹と云ふのは何處の人かと、宿の主人にきくと、
「お武家さんはまだ小川村の聖人さまを、ご承知ありませんか。」
と云つた。

○

ある夜、藤樹先生が寂しい道を一人で歸つて來られると、物かげから五六人の盜賊が飛び出して、
「さあ、酒代を置いてゆけ。」
と前に立ち塞がつた。藤樹先生は、少しも驚かず、
「よろしい。酒代が欲しければあげよう。」
と云つて金入から二百文ばかりを出して渡された。盜賊は大聲をあげ、
「これ位のことで承知が出來ると思ふか。身ぐるみ置いてゆけ。ぐずぐず云ふと命がないぞ。」
とおどしつけた、神色自若としてしばらく考へた藤樹先生は、
「どう考へても、お前たちにそれより多くものを與へる道理がない。命をとるならとつて見よ。

おれも犬死はしない。此の場で名乘つて勝負をしよう。おれは小川村の中江與右衞門である。お前たちは何人だ。」

と落付いて云はれた。與右衞門と云ふのは、藤樹先生の通稱である。これを聞いた盜賊は、大に驚き、刀を地上に投げすてゝ、

「あなたは聖人さまで御座いましたか、子どもと云へど知らぬ者もない聖人さまに、私たちは、まあ何といふ惡人でせう。これからもう決して惡事はしません。どうぞお許し下さい。」

と先生の足下に跪いた。

藤樹先生は、罪を許し、懇々と道を說いて諭されたので、彼等はみな善人になつた。

○

藤樹先生がある年江戸に上り、町中を歩いて居られると、酒に醉つぱらつた大小神祇組の亂暴な武士どもがこれを見つけ、

「あそこへ來たのは近江聖人だぞ、聖人だなどと云つても、我々の威光には恐れるだらう。おどしつけてやれ。」

とわざと先生に突き當り、

「おい、お前だな、聖人などと云つて嘘を吐き、人をたぶらかす奴は……」

と口ぎたなく罵り、今にも打つてかゝらうとした。先生は少しも騷がず、

「わしは近江の百姓で、村の子どもに讀み書きを敎へて居るだけです。聖人でも何でもありませぬ。」

と云はれた。その落付いた態度に氣拔けがして、流石に亂暴武士も手出しが出來ず、

「やあ、これは失禮をいたしました。まことに申譯はありませぬ。どうか我々の不作法を許して下さい。」

と其の過ちを悔いた。

○

近江の大溝に入牢されて居る罪人があつた。村の人たちが同情して、藤樹先生を訪ね、

「別に大罪を犯したといふわけでもないのに、あゝして長く入牢して居ては、家族の者もかはいさうですから、先生のお力で何とか許される方法はないものでせうか。」

と相談をかけた。先生は其の夜役人の許に行き、四方山の物語をして歸られた。翌日役人は例の罪人を許したので、下役の者は、不思議に思つて、

「何故かう速かにお免しなさるか。」

と尋ねると、

「藤樹先生の扱ある上は仔細あるまい。」

と答へた。

「藤樹先生のお扱といつて、昨夜そのことについては一言もお話がなかつたでは御座いませんか。」

と問ふと、答へて云ふには、

「殊更にお話はなかつたが、昨夜、細々と語られたのが、どうも、其のことらしく考へられたから……」

○

藤樹先生の門人に大野了佐と云ふ者があつた。性質が極めて魯鈍で、わずかに二三句を二百べんも繰り返して、やつと記憶したかと思ふと、食後にはもう忘れて居るといふ有様であつた。けれども、先生は、倦むことなく教へられたので、了佐は、遂に志を遂げ、醫者となることが出來た。藤樹先生は、ある時、

「自分は了佐のために殆ど根氣をつくした。併し、愚昧といへども勉強の力は偉大なるものである。」

と、語つて多くの人々を諭された。

○

藤樹先生がなくなられて、久しくたつてから、一人の武士が小川村を通り、

「藤樹先生のお墓は何處か…」

と田を耕してゐる農夫にたづねると、農夫は鍬を置いて、

「一寸お待ち下さい。只今御案内をいたします。」

と直に家に馳せ歸り、手足を洗ひ、着物を着換へ、武士を先生の墓前に案内し、水を注ぎ花をそなへ。恭しく拜んで、

「これが先生のお墓でございます。」

と云つた。武士は、あまり農夫が叮嚀にするので、

「お前さんは先生と何か深い緣故のある方ですか。」

とたづねた。その農夫は、

「いゝえ、さうではございません。私どもが、父子兄弟揃つて睦しく暮して居るのは、みな先生のおかげでございます。此のご恩を深く感じて居りますから、此の村ばかりではなく、近所の村の人々も、みんな先生のお慕へ詣でる時には、かやうにいたして居るのでございます。」

と云つた。これをきいた武士は、藤樹先生の德がこれほどまで鄕黨の者を感化して居るのかと思つて感心した。

八三　學者の清貧

德川時代の學者には、貧しい生活をしながら、少しもそれを厭はず、學問を勵んだ者が少なくなかつた。伊藤東涯の門人廣瀨鱗も其の一人であつた。

ある、時一人の友人が鱗を訪ねて、時の過ぐるをも知らずに快談して居る中に正午になつた。友人は、

「大きにお邪魔をした。もう午飯でせう。」

と云ふと、鱗は笑つて、

「今日は食はないのだ。」

と答へる。

「なぜ…」

と友人はまたきいた。

「米がないから……」

と鱗は平氣で答へた。

友人は驚いた。　さうして、歸つてから早速鱗に米を贈つた。　又ある冬の朝、隣の家の主婦が、鱗の獨居をあはれみ、火を持つて來て、それを炬燵に入れようとすると、中から狗の子が澤山出て來た。主婦は、びつくりして其のわけをたづねると、

「實は昨夜外で狗の子が悲しさうに啼いて居るから、戸をあけ見ると、雨に濡れて居た。あはれに思つて宿をかしてやつたのだ。おかげでおれも暖かでよかつた。」

と言つて笑つた。

八四　加賀の千代

昔加賀の國に千代と云ふ女の俳人があつた。千代は子どもの時から俳句を好み、どうかして立派な俳人になりたいものだと毎日思つて居た。

その時分、美濃の國に盧元坊といふ俳句の宗匠があつた。かねて其の名をきいて居た千代は、子ども心にも、どうかして其の先生に就いて、俳句を學びたいものだと考へ、いくたびか父に向つて、美濃の國につれて行つてくれと頼んだが、父は笑つてきゝ入れなかつた。

それから何年かの後であつた。ある年、その盧元坊が旅のついでに加賀の國へ來た。

千代は、大に喜んで、直に盧元坊の宿をたづね、多年の志を打ち明けると、

「俳句をおやりなさるか、それはご婦人にめづらしい。」

と言ひながら、盧元坊は、

「それでは一句承りませう。題は ほとゝぎす としておきませう。」

と云ふ。千代は即座に一首を吟んだ。盧元坊は一寸見て、

「もう一句よんでごらんなさい。」

と言つたきり、よいともわるいとも言はなかつた。千代は又一句よんだ。

「これもまだぢや。」

と言つたので、千代は又一句をよんだ。かくて十數句に及んだが、盧元坊の滿足を得ることは出來なかつた。其の中に盧元坊は眠つてしまつたので、千代は其の枕邊に坐して、しきりに口ずさんで居た。

もう夜も明けようと云ふ頃、盧元坊はふと眼をさまして、

「まだ起きて居なさつたか。」

と言ふと、千代は、直ちに、

「ほとゝぎすほとゝぎすとて明けにけり。」

と答へた。盧元坊は手をうつて、

「それでよい。その心を忘れなさるな。」

とはじめてほめた。

千代は、それから大につとめて、遂には名高い俳人になつた。

「朝顔につるべとられて貰ひ水。」

といふのは、千代の作つた名句である。

八五　學問を好む青年

その一

ジノベのヂオゲネスが、青年時代にアテネへやつて來て、名聲喧々たる哲學者のアンチスチネースに教授を受けやうと思つた。

けれども、アンチスチネースは、當時の時勢といふものに不快を抱き、深く悒鬱に沈み、もう弟子などを取るまいと考へて居たので、ヂオゲネスがいくら入門を乞うても、アンチスチネースは固く拒絶した。それでも、熱心な青年は、其の塲を去らうともせず、尙ほしきりに賴んだので、遂にアンチスチネースは、杖をふり上げて彼を打たうとした。

「お打ちなされ。」

ヂオゲネスは叫んだ。

「御存分にお打ちなさつた後に、どうか教へて下さい。」

此の一言が深くアンチスチネースの心を動かした。彼は忽ち振り上げた手を止め、此の青年の顏を眺めた。さうして、青年の願ひを容れ、快く教授することを約した。

その二

熊澤蕃山が二十四歳の時であつた。其の頃近江聖人とよばれた中江藤樹の德を慕つて、遙々と備前の國から、近江の小川村までやつて來た。中江藤樹の家を訪れて、ていねいに、

「是非門人にしていたゞきたい。」

と賴んだが、謙遜な藤樹は、

「それは思ひもよらぬことです。私は田舍の農夫で、耕作の傍、近所の子どもに讀み書きを教へて居るに過ぎません。人に教へるやうな人間ではありません。」

と言つて何と言つても聞き入れない。

蕃山はそのまゝ歸らうとは思はなかつた。

「私はどうあつても先生の敎へを受けなければ、此の土地を去りませぬ。お許し下さるまで御門前を拜借致します。」

と言つて、恭しく禮をして藤樹の家を出で、門前に一枚の蓆を敷き、その上に端坐した。

夜になつても蕃山はそこを離れなかつた。翌日もまだ坐つて居た。近所の者が何と言つてすかしても動かうともしなつた。

かくすること二晝夜に及んだ。情け深い藤樹の母がこれを見て、大に同情し、

「それほどまでになさるなら、弟子にしてあげてはどうか。」

と藤樹に諭された。孝行な藤樹は母のいはれることであるから、

「では師弟にはならぬけれども、友人となつて共に學びませう。」

と言つて、初めて承諾せられた。蕃山は大に喜んだ。

翌日から、蕃山は、藤樹の家に入り、朝は早く起きて家の掃除をし、晝は共に畑に出でゝ働らき、夜は忝しく敎を受けた。

八六　あづま下り

赤穗の浪士が愈く吉良の屋敷へ打入りをする少し前のこと、神崎與五郎休則は、たゞひとり、東下りの道すがら、箱根の山にさしかゝつた。峠のかけ茶屋に、しばし旅の勞れを休めつゝ、油のやうによどんで、小波一つ立たぬ、午後の湖にうつる、うす紫の富士の高嶺を遙かに眺め、

「あゝ實によい景色だ。」

と言つて居ると、坂の下から馬の鈴音が聞えた。やがてそこへ現はれた馬士は、與五郎の姿をちらと見て、

「もし旦那、馬に乘つてお呉んなさい。」

と前に立つた。與五郎は、

「いゝや、手前は馬には乘らない。」

と答へると、馬士は怒氣を含んで、

「やい、何と言つた。馬には乘らない…　腰ぬけ武士め。」

と罵つた。與五郎はむつとして、

「おのれ無禮な奴め…」

と刀の柄に手をかけたが、思ひ起したのは、山科をたつとき、大石内藏助どのから誡められたことであつた。大望を抱く身が、町人を相手に喧嘩をして居る場合ではない。大事の前の小事だと思つて、じつと胸を撫で下した。此の樣子を見てとつた馬士は、威丈高になり、

「何だ。おれを斬る氣か。斬るなら斬つて見ろ。街道筋で人にも聞えたくらやみの丑五郎だ。さあ斬つて貰はう。」

と大道へ身を投げ出した。與五郎は、言葉やさしく、

「町人、手前が惡かつた。許してくれ。」

となだめたが、丑五郎は聞き入れなかつた。

「惡かつた、許してくれだ。許してくれなら許してもやらうが、たゞでは許せない。こゝへ手をついてあやまれ。」

與五郎は、丑五郎の云ふがまゝに、大地に手をついてあやまつた。丑五郎はせせら笑つた。

「まだそれだけでは承知が出來ぬ。金を五兩出して、詫證文をかけ。」

與五郎は、丑五郎の望むがまゝに金を與へ、硯をかりてさらさらと一通をしたゝめると、丑五郎は側から見て、

「おれにわかるやうにいろはで書けよ。」

と云ふ。與五郎は云ふ通りに書いて筆を置いた。

勝ち誇つた丑五郎は、手綱を肩に悠々と三島の宿をさして歸つて行つた。與五郎は、しばらく其のうしろ姿を見送つて居た。

後日譚

赤穗義士が本懷を達し、高輪泉岳寺で自刄してから後のこと、ある夜、三島の宿で、一人の講談師が義士打入の話をした。話半ばに聽衆の中から、

「一寸待つてお呉んなさい。其の義士の名前をもう一度讀んで貰ひたい。」

と言つて出た男があつた。それは馬士の丑五郎であつた。講談師は再び讀み上げた。丑五郎は、聲をあげて泣き倒れ、

「あゝすまないことをした。すまないことをした。みなさんこれを見て下され。」

と取り出したのは、一通の詫證文、其の終りには、平假名で、水莖のあとも美しく、赤穗浪士神崎與五郎と認めてあつた。一同は呆氣にとられた。丑五郎は仔細の物語をしてから、

「其のやうに忠義な武士とは知らずに、おれは五兩の金を取つて詫證文まで書かせた。罪亡しに出家となつて、一生涯與五郎さまの菩提を葬ふのだ。」

と言つた。

日頃から蛇のやうに思つて居た丑五郎の發心をきいて、多くの人々は感じ入り、まことに人の性は善であると語り合つた。

八七　馬鈴薯王

外國で成功して居る日本人は尠なくないが、米國人からポテトー王（馬鈴薯王）と尊稱せられて居る牛島謹爾氏の如きは、最大成功者の一人であらう。

牛島謹爾氏は福岡縣久留米在の人、大志を抱いて米國へ渡つたのは、明治二十一年二十三歳の時であつた。しばらく米國人の家庭に入り、其の農園に働らきながら、人情・風俗・言語等の

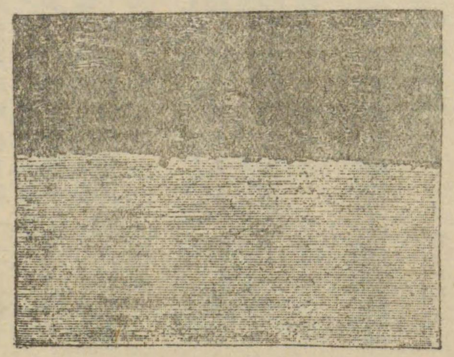
研究をなし、明治二十三年に至り、はじめてサクラメント附近に、十五エーカーの土地を借り受け、農業に着手した。

農業を以て身を立てることは、渡米前からの決心であつたが、彼の地へ渡つてから、馬鈴薯の販路が最も廣く、發展の餘地多きことを認め、遂に馬鈴薯の栽培を專業とすることにした。

牛島氏は事業に着手するに當つて、二十五年計畫を立て、最初の十年間を以て研究の時代とし、成敗の如何に拘はらず、年々其の事業を擴張してゆくことにした。氏はおもへらく、

「其の事業を次第に擴張せざれば、一年失敗をすると、一年成功しても回復することは出來ない。事業を擴張して十年の失敗は、一年の成功によつて回復する策を立てなければならぬ。」

と、其の抱負の如何に遠大であるかを察することが出來る。



けれども、まだ其の土地の肥瘦や、氣象の變動に精通せず、これに適應せる栽培耕作の方法に經驗の乏しかつた爲めに、牛島氏の事業は、最初の年に於て、ものの見事に失敗した。され

ど、牛島氏は、毫も失望せず、益く勇氣を鼓して研究の歩を進め、今度こそは前年の失敗を回復せんとしたが、翌年も亦失敗した。かくて失敗に次ぐに失敗を重ね、七年間の星霜はいつしか過ぎた。牛島氏の滲狀は、目も當てられなかつた。而かも、此の失敗の中にも初一念を捨てず、年々事業を擴張し、初めの十五エーカーを遂に三百六十エーカーに押し擴めた。もう今度失敗したらば、到底前途に望みがないといふ明治二十九年の三月、牛島氏は鄕里の親友に寫眞を添へて書を寄せ、

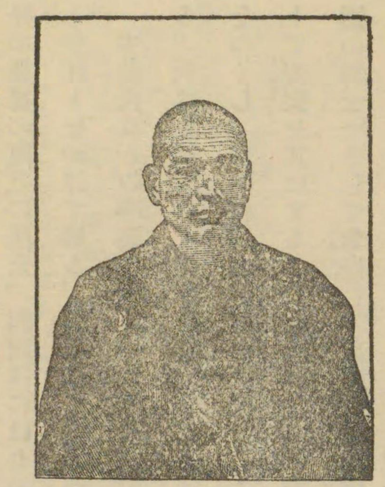
「これまでは隨分我慢をしたが、今年はもう最後でせう。まだ一縷の望みはあるが、若し失敗したらば、自分の事業家たる生命はこれで終り、再び生きて快談する期はあるまい。」

と生別の辭を述べた。

されど天はいつまでも人を苦しめるものでない。其の秋に至つて、はじめて幸運は氏の農場を訪づれた。驚くべき大豊作に忽ち數年の失敗を回復し、負債は一時に償却することが出來た。

小成功に安んぜざる牛島氏は、更に第二期の計畫を實行したが、其の翌年はまた失敗に歸した。かくて一勝一敗を繰り返すこと數年の後、明治三十三年には三千エーカーの農園に滿目青々として豊作の色は漂ふた。牛島氏は快感禁じ難く、闇中に詩を吟じて農園から歸るのが常であ

つた。然るに何ごとぞ。大洪水のために馬齡薯は皆流され、田畑は荒れ果てゝ、今までの苦心はまた水の泡になつてしまつた。流石の牛島氏も今度こそは起つことが出來ないであらうと、世間の人々は評して居たが、牛島氏は少しも屈することなく、ある人から資本の供給を仰いで更に一層大規模の經營に着手した。



それから事業は年と共に順調に向ひ、最近では一年の産額が四十萬俵に及んで居る。米國人は馬齡薯を最も多く食ふ國民で、その料理の方法には三百種もある。從つて馬齡薯の産額は甚だ多いが、而かも其の産額の第一等と云はれて居るオレゴン洲でも、一年に六十萬俵を超へず、ワシントン洲は四十萬俵に過ぎない。然るに、カリフォルニア洲の一日本人たる牛島氏の農園から出る馬齡薯の産額は、ワシントン洲全體の産額に略ぼ等しいのである。加之、牛島氏の農園から産する馬齡薯は、品質が善良で、其の大小形狀が殆ど一定して居ると云ふ所から、米國の社會に於て最も歡迎せられ、牛島農園の産出と云へば、見本なしに數千俵の注文をする商人もあると

のことである。

馬鈴薯は毎年同じ土地に栽培すると、品質が次第に惡くなるので、牛島氏は種いもに最も注意し、自分の農園に生産したものゝ中、最も精良なるものを選び、これを風土、氣候の異なつた數百里の遠方に移し植ゑ、更にこれを方向を異にせる數百里の遠方に栽培し、三度目には自分の農場の附近に植ゑ、四回目にはじめてこれを種いもとして用ひ、他の農民の及ばざる手數と費用とをかけて居る。斯くして牛島農園の馬鈴薯は、品質の精良を賞讃せられて居る。

牛島氏はその事業に於て一大成功者であるのみならず、米國人から多大の尊敬を拂はれて居る。氏は資性極めて溫厚忠恕、常によく米國人の心理を了解し、慈善事業及び公共事業にも力をつくし、市中に病者があれば親しくこれを見舞ひ、死者があれば必ず葬儀に列し、市民に交りて苦樂を共にすることを忘れないので、米國の人は牛島氏を他國の人と思はず、「正直な米國の紳士」として尊崇し、氏が天災地變の爲めに失敗した時には、爭ふてこれを救助せんとし、常に氏の成功を祈り、自由に其の驥足をのべしめんとして居る。されば排日問題の如何に盛んな時でも、米國人の牛島氏に對する信頼と敬愛とに、少しも變はりはないとのことである。人格の力の偉大なることが熟々と思はれる。

八八 鬼界が島

卒塔婆流し

鹿が谷の會合から、清盛の憎惡を受けた法性寺の執行俊寛僧都、丹波の少將成經、平判官康頼の三人は、鳥も通はぬ西海のはての鬼界が島に流された。

家もなく、食物もなき、離れ小島に着いた流人は、濱邊に粗末な廬を結びて雨露を凌ぎ、丹波の少將の舅平敎盛の領たる肥前の國かせの莊から、送つて來る僅の衣食によつて、草葉の末にかゝる露の命の如きはかない日を送つて居た。三人ともに故郷のことを思はぬ日とては一日もなかつた。成經と康頼は、日ごろ念ずる熊野權現をふし拜み、

「願はくば我等にあはれみを垂れ、今一度なつかしい故郷へかへしたまはれ。」

と毎日祈つて居た。ある夜の夢に康頼は、吹き來る風につれて、沖の方から、み熊野のなぎの葉が二つばかり袂にはいつたのを見て、故郷の戀しさはいやまさり、せめてもの心やりにと思

ひ、其の翌日から千本の卒塔婆をつくり、それに、

さつまがた沖の小島にわれありと、親には告げよ八重のしほかぜ。

思ひやれしばしと思ふ旅だにも、なほふる里はこひしきものを。

と云ふ二首の歌を書いては海の中に投げ入れた。

赦　免

多くの月日はたつた。ある日都からの使の船が此の島についた。船から上つた使者は、三人をたづね出して、使の趣を述べ、赦免狀を讀み上げた。赦免狀には、「此の度中宮御產のお祈によつて、鬼界が島の流人成經・康賴の二人を赦免する。」と書いてあつた。俊寬の名は書いてなかつた。俊寬は夢かとばかり驚いた。同じ罪によつて、同じ配所に日をくらした二人の者が許されて歸るのに、己れ一人が取りのこされるとは何事であらう。天を仰ぎ地に伏して、泣き悲しんだが、その甲斐もなかつた。

使者は二人を船に乘せた。俊寬は使者に向つて、

「お情けを以て、此の俊寬も共におつれ下さい。」

と賴んだが、使者は、赦免狀になき者をつれかへることは役目として出來ぬとことはつた。俊寬は、成經・康賴の二人にすがり、

「各〻がたは此の俊寬を見すてたまふか。日頃のお情けに、都までは叶はずとも、せめて九州の地まで此の船に乘せておつれ下さい。」

と泣き口說いた。

二人もそゞろにあはれを感じたが、赦されて歸る自分たちではどうすることも出來なかつたので、言葉やさしく、

「俊寬どの、おん身の御心中お察し申す。おん身一人を此の島に殘して、都へかへる我等を不人情だと思召し下さるな。都へかへつた上で、折を見て、入道どののけしきを伺ひ、おん身の赦免を願つて、迎へに參ります。それまで、どうぞおからだをおいとひなされ。」

と言ひながら船に乘つた。

猶ほも取りすがる俊寬の手を拂ひのけて、船は島を離れた。

たゞひとり渚にとり殘された俊寬は、聲を限りに叫びながら、沖ゆく船を見送つて居たが、やがて其のかげが見えなくなると共に、白波のさはいで居る磯邊に泣き倒れた。

有王島下り

幼ない時から俊寛僧都に召使はれた有王は、鬼界が島の流人の中、二人が召しかへされて、わが主人のみひとり殘されたのをきゝ、かなしみの涙にくれ、此の上は彼の島にわたつて、主人のおん行方をたづねるより外はないと、奈良の片ほとりにかくれ住める僧都の息女を訪れると、喜んで父上に宛てた一通の書面を有王にわたした。有王はこれを人に見せぬやうにと髪の中にかくし、彌生の末に都を立つた。

漸くにして薩摩につき、商人の船によつて辛うじて島についた。聞きしにまさる不便の地で、田もなく畑もなく、里もなく村もない。僅に住んで居る人はあつても、言葉さへも十分に通じない。有王は峰にのぼり谷にわけ入り、心を盡して探したが、行方は更に知れなかつた。

ある朝濱邊で蜻蛉の如く痩せ衰へた一人の法師に逢つた。着物はぼろぼろに破れ、髪はいばらのやうに亂れて居た。片手には荒海布をもち、片手には魚をもち、よろよろと歩いて居た。有王は近づいて、

「一寸おたづねいたしたうございます。此の島に都から流されて來た俊寛僧都と申すお方をご

存じではありますまいか。」

とたづねると、法師は有王を一と目見て、手に持つて居る物を投げすて、砂の上に倒れ伏した。有王はおどろいて、

「それではこれがわが主人であつたのか。」

と涙に咽んだ。世にある頃は法性寺の執行として人にも聞えた貴き御身を、此のありさまは何ごとぞ。有王は恭しく膝の上に主人を搔き抱くと、やゝあつて心づいた俊寛は、

「はるばると波路を凌いで、たづねて來てくれたお前の志はありがたいが、わしは夢を見て居るやうな氣がする。あけても暮れても都のことばかり思ひつめて居るので、時々は夢とも幻ともなく、故郷の人々に逢ふ。今お前の訪ねて來てくれたことも夢であつたら、どうしよう。」

と云ふ。やがて俊寛は有王を家に伴つた。家とはたゞ名ばかりで、竹を柱とし木の葉を屋根にかけた、人の住居とは思はれぬものであつた。此の痛ましきありさまを見て、有王は更に一層かなしみを增した。

有王は、俊寛に向つて、都のことを細かに語り、姫よりたまはつた手紙を差出した。俊寛は張り裂けるやうな胸をじつと靜めて、手紙をよみ下した。あまりのなつかしさにしばし言葉も

出なかつた。

有王にめぐりあつた嬉しさに、心のゆるみを生じたのか、俊寛ははかに病の床についた。有王は心配していろいろ看護したが、更に効果も見えず、二十三日目に俊寛は遂に其の庵の中であへなく此の世を去つた。

八九　雪のやどり

其の夜は雪が降り積つて居た。常陸の國を行脚して居た親鸞上人の一行は、日野左衞門の家をたづねて、

「旅の僧でございますが、此の吹雪で難儀いたして居ります。どうか一夜の宿を御無心申したい。」

と言つた。女房のお兼は戸をあけると、六十あまりの老僧が二人の弟子をつれて外に立つて居た。墨染の衣に、笈を負ひ、草鞋に杖と云ふ紛裝、笠の上には雪が積つて、衣の袖には雫がしみて居た。

お兼は親切に、

「それはお困りでございませう。もう十町ほどおいでなされば宿屋がございます。」

と敎へた。弟子の僧は、

「あの私たちは托鉢して歩きます者で、お錢を持つて居りません。眠ることさへ出來れば、どのやうなところでもよろしいのでございますが。」

と再び頼む聲をきいて居た左衞門は、奥から、

「折角だがお斷りしよう。」

といやな顔をした。心のよいお兼は、

「困つてゐらつしやるのだから、泊めてあげようではありませんか。何も迷惑になるのではなし、それにご出家ではありませんか。」

となだめたが、重なる不幸のために心が荒んで、毎日獵に出て殺生ばかりして居る左衞門の耳には入らなかつた。

「いやだよ。私は坊さんは大嫌ひだ。世の中で一ばん嫌ひだ。」

と聲を荒くする。親鸞上人は、弟子に向つて、

「私がも一度頼んで見ませう。」
と言つて、左衞門に、
「御迷惑ではございませうが、これも御縁と思召して一夜だけ泊めていたゞかれませんでせうか。」
と叮嚀に頼んだ。左衞門は冷笑して、
「お前さんは師匠樣だな、なるほどありがたさうな顔をしておいでなさるよ。あなた方はご說教をなされば、みな喜んで米や錢をもつて行きますでな。お寺は繁昌しまして、坐つて居つて安樂に暮して行けますよ。あなた方は全くえらい。むつかしいお經を澤山讀んで、其のお經に書いてある通りに實行なさるのでな。私は今朝も殺生をしました。それから喧嘩もしました。酒ものみました。私みたやうに汚れたものゝ宅に泊つて戴いては、畏れ多い氣がしますでな。」
と口汚く罵る。お兼ははらはらして居た。弟子の僧は、
「私ら二人は泊めていたゞかなくてもようございますが、どうぞお師匠さまだけは泊めてあげて下さい。ごらんの通り寒さに慄へてゐらつしやいます。」

と云ふ。
「出來ないと言つたら出來ません。」
「ではあきらめませう。どうぞその爐で衣を乾かすことだけお許し下さい。」
お兼が傍から、
「さあ、どうぞお乾しなさいませ、今炭をついであまげす。」
と云ふと、左衞門は、
「餘計な世話をやくな。」
とさへぎつて、
「何と云ふくどい面の皮の厚い坊主だらう。早く出てうせい。此の乞食坊主め。」
と言ひながら、女房のお兼と子の松若が止めるのを拂ひのけ、杖をふり上げて親鸞をしたゝかに打つた。憤慨した弟子の僧をしづかにかへりみた親鸞は、
「良寛、手荒なことはなりませぬぞ。私は寧ろあの人を心の純な人だと思つて居ますのぢや。」

○

「あゝ苦しい。それでは今のは夢であつたのか。」

左衞門は目をさましてあたりを見まはした。お兼は、
「あなたどうなされたのです。大變うなされましたよ。」
と靜かにたづねた。
「私は今恐ろしい夢を見たのだ。雞を殺して居る夢を見たのだ。思ひ出しても氣味が惡い。」
と左衞門は夢のことを詳しく語り、
「今夜は何だか變な氣がしてならぬ。宵の出家のことが氣にかゝる。酒に醉つて居たので、少し手荒なことをした。今ごろはどうしたゞらうね。」
としんみりした氣分で云ふ。
「雪の中を迷つて居るでせう。」
「あの坊さんはどうも普通の坊さまと少し變はつて居たね。」
「あなたがあのやうに手荒なことをしても、少しも怒りもせず、心の純な人だとおつしやいました。」
「そんなことを言つたかえ。」
と左衞門はやゝ涙ぐみ、

「私はあやまらなくてはすまない。何だかまだ門口にゐられるやうな氣がする。一寸見てくれ。」
と云ふ。お兼は、
「そんなことがあるものですか。」
と言ひながら、手燭をともして土間に下り、戸をあけて外を見ると、雪の中に親鸞上人と二人の弟子とは、石を枕にして寢て居た。
「まあ、勿體ない。どうぞみな樣内にはひつて下さい。」
「ではあげて貰ひませう。」
三人は草鞋を脱いで座敷にあがり、爐の側に寄つた。左衞門は、
「宵には酷い仕打をしました。酒をのんで氣が變になつて居たのです。卑しい奴だと思召したでせうがお許し下さい。」
と詫びた。親鸞上人は、
「何事も佛さまが許して下さいませう。私たちはお互に救ひ難い惡人です。」
と左衞門に向つて、懇々と佛の道を說いてきかせられた。
「私はあなたのお話をきいて居りますと恐ろしくなります。私のやうな惡人でも佛さまは罪を

許して下さいませうか。」

「どのやうな惡人でもお許し下さいます。」

と語つて、上人はやがて弟子の僧に向ひ、

「良寛一寸私の笈を見てくれ。」

と云ふ。弟子の僧は笈を開いて、小さな阿彌陀如來の像を取り出すと、左の手がかけて居た。

「おゝ私は何といふ罪の深い者でせう。此の美しい佛樣の御像を杖で打ちこはしたのです。」

と左衞門は男泣きに泣いた。

「左衞門殿、お泣きなさるな。左程に罪深きあなたをも、其の儘にお許し下さるのが佛さまのお慈悲です。此の佛像はかたみとしてあなたに差上げます。どうやら夜も明けて來たやうです。私たちはお別れをいたしませう。」

「涙をぬぐつて、左衞門は言つた。

「此のまゝお別れ申すは辛うございます。いつまた逢はれるかも知れません。」

お兼も側から名殘を惜しんで、

「せめて四五日なりとお泊り遊ばして。」

と止めたが、

「いやいや、會ふ者はどうせ別れなければならないのです。それが世の定めです。戀しく思召さば、南無阿彌陀佛を唱へて下さい。」

と親鸞は言つて身仕度をした。

「ではどうあつてもおたちになりますか。私はあなたを一生忘れません。あなた方のために祈ります。」

と左衞門、

「どうぞおからだを大切になさつて下さい。」

とお兼、

「夜も明けました。」

「雪も止んだやうで御座います。」

と二人の弟子、

「左樣なら。」

「左樣なら。」

「左様なら。」

出て行く、三人の姿を、左衛門とお兼と松若は涙ぐみつゝ見送つた。

九〇 大西郷の逸話

大西郷は故郷へ隱棲してから、毎日尻切草履をはいて、野良仕事をして、日を暮して居られた。その家も極めて粗末な百姓家であつたが、喜んで客を迎へられた。十四五歳の子どもたちがたづねて來ても、ちやんと坐つて、兩手を膝の上に置き、

「よくござつた。」

と云つて會はれた。子どもたちが、

「先生、一つ字を書いて下さい。」

と願ふと、

「書いてあげよう。」

と言つて、直に硯と筆とを取り出し、書いて與へられた。

○

其のころ薩摩には士尊民卑の氣風があつて、武士が途中で下駄の緒などを切ると、通行の者を呼び止めて、平氣でこれをなほさせた。

ある時、一人の少年が田舍道で木履の緒を切らした。そこへ馬を曳いて通りかゝつた老農夫があつた。少年は彼を呼び止め、鼻緒をすげるやうに命じた。農夫は直に持つて居た袋から小刀を出して、ていねいにそれをなほした。少年は其のまゝ揚々として立ち去つた。

翌年、大西郷がある家へ行つた時、恭しく茶を捧げて出た一人の少年があつた。大西郷は笑ひながら、

「おゝおんみであつたのう。去年の今ごろ吉野原の開墾地から歸る途中で、此の老爺が木履の緒をすげてあげたのは。」

と言はれた。少年はそれをきいて、ふと其の顏を仰ぐと、驚くまいことか。百姓老爺と思つて木履の緒をすげさせたのは、天下にかくれなき大西郷であつたのだ。少年は恐れ入つて詫び入ると、大西郷は笑つて、

「何の無禮があらう。あの時は大將の西郷ではなく、武村の吉と云ふ百姓であつたのぢや。」

○

大西郷はある時鰻屋で飯を食はれた。其の家を出るときに、

「金は置いたよ。」と言つて歸つてしまつた。

「ありがとうございます。」

と言つて、亭主は、あとで見たが、金は一文も置いてない。不思議に思つたが、

「西郷のことであるから、粗忽にものは言はれない。」

と考へて、色々しらべ見ると、飯櫃の裏に十圓札が貼りつけてあつた。其の頃の飯代は十錢にも足らぬものであつたから、亭主は驚いて、早速大西郷の家へかけつけ、それを返すと、大西郷は笑ひながら言つた。

「取つて置いて下さい。書生がいつも厄介になるさうだから。」

大西郷は書生たちが、よく此の鰻屋で食ひ倒したのをきいて居たからである。

九一　葛飾北齋

享和の頃、葛飾北齋と云ふ有名な畫家があつた。ある日オランダのカヒタンと云ふ人が、北

齋の許を訪れて、繪を畫いてくれと頼んだ。其の繪は町人の子供が生れるところ、其の子どもが大きくなつて算盤の稽古をして居るところ、成長したところ、老年になつて死ぬところ、葬式をするところを、男女各〻一卷づゝにして書いてくれといふのである。カヒタンは、

「若し其の繪をかいて下さればお禮には百五十兩さし上げます。」

と言つた。すると江戸の醫師某も亦、

「私にも同じ繪を書いてくれ。」

と、これもお禮には百五十兩を出すといふことになつた。

北齋は熱心に其の繪をかいて、カヒタンの所へ持つて行くと、大に喜んで直に約束通りの金を拂つてくれたが、江戸の醫師は、

「私はカヒタンのやうに金持でないから、半分にまけて七十五兩にして下さい。」

と云ふ。北齋は、

「それなら、なぜ最初から其のことを約束して下さらなかつたか。今これを七十五兩で差上げたら、外國人に高値で賣つたことになりますから、其のやうなことは斷じて出來ません。」

と言つて承知しない。醫師は更に、

「それでは二卷の中の男子の圖の方だけを、七十五兩で賣つて下さい。」

と言つたが聞かなかつた。二卷とも其のまゝ懷に入れて歸つてしまつた。北齋の妻は、

「此のやうな繪は、こちらではあまり珍らしいものではありませんから、七十五兩も出して買ふ人はありますまい。お約束とは違つても、お賣りになつた方が得策ではありませんか。」

と言つた。北齋は、

「勿論賣つた方が得策だといふことは知つて居る。けれども、いくら手前の都合がよいからとて、外國人に懸値をして賣つたことになつては、日本人の信用に係る。」

と言つて居た。

北齋が貧乏に暮して居るにも拘はらず、よく義を重んじて、彼の畫を賣らなかつたことを、通譯から聞いて、カヒタンは頗る感心し、直にまた百五十兩出して、その畫をも買ひ取つた。

カヒタンがそれを持つて居ると、オランタ人は北齋の人物を大に賞め、オランダから北齋の畫を註文する者が續々と出て來た。

北齋の繪は西洋の畫家に賞讃せられ、今日でも彼の地では、大にもてはやされて居るのみならず、西洋に起つた印象派といふ一派の畫法は、北齋の影響を受けて居るところが尠なくない

といふことである。

九二　小松原の法難

安房の國の小湊に生れた日蓮上人は、法華宗の一派を唱へて、他の宗派を天魔と罵り、國賊と叫び、はげしく攻擊したので、多くの法敵から憎まれ、いく度か其の身に危害の及ぶこともあつた。しかし自信の強い日蓮は、少しも屈せず、礫の降る中でも、平氣で辻說法などをしたので、安房や上總のあたりでは、次第に多くの信者が出來た。

東條の城主平景信は、日蓮の信者が日毎に多くなるのを聞いて、不快に思ひ、折があつたら彼をなきものにして、念佛宗の法敵を滅ぼしてしまひたいと、あけくれ日蓮の起居を窺つて居た。

そんな事とは少しも知らぬ日蓮上人は、ある日十人ばかりの從者と共に、小松原のほとりを歸つて來られた。此のしらせをきいて景信は大に喜び、

「今日こそは、彼の惡僧を討ち果してしまはう。」

と多くの人數を驅り立てゝ、彼の行く手を遮り、前後左右から取りかこみ、雨のやうに矢を放つた。

此の不意打にひどく驚いた一行は、衣の袖を首にかざして、木立の間にかくれ、しばし難を避けたが、敵は次第に近づき、太刀を拔いて切りかゝつた。如何に武勇の人でも、斯く不意打にあつては支へ難いのを、其の身に寸鐵をも帶びて居ない僧侶では、到底防ぐことも出來なかつた。心の剛い弟子の競忍は、先に立つて敵に抵抗したが、忽ち敵せずして討たれた。乘觀坊が其のあとに續いたが、これもまた傷を受けて退いた。景信は其の勢に乘じて、日蓮に近づき、たゞ一刀の許に討ち果さうとすると、持つて居た太刀は二つに折れて、日蓮の眉間には三寸ばかりのかすり傷を生じたのみであつた。

此のありさまを見て景信は、心の中にやゝ恐れを生じて居る折柄、日蓮の信者たる天津の城主工藤吉隆は、この事をきいて大に驚き、取るものも取りあへず、驅けつけて來て敵を防いだ。景信は、更に精兵を加へて、工藤の軍を打ち敗つた。吉隆は衆寡敵せざるを悟り、從者に命じて日蓮を守護せしめ、ひそかにこれを天津の館に落した。

日蓮は辛うじて命を全うしたが、蹈み止まつて防戰した工藤吉隆は遂に敗れて、あはれにも

其の場に戰死した。日蓮を見失つた景信は、無念に思つたが、士卒の疲れて居るのを見て、一たび兵を引きあげた。

日蓮上人は、吉隆の討死をきいて深くかなしみ、

「御身の御厚恩は、日蓮決して忘れませぬ。無上妙法のために一身を捧げられた御身は、天晴法華經の大行者たる務めをお果しなされた。日蓮もやがて程なく參りますから、あの世でお待ち下されよ。」

と生ける人にもの言ふ如く語り、妙隆院日玉上人と謚せられた。

景信の軍は一たん退いても、必ず押しよせてくるであらうから、こゝに在しては危いと、工藤の方では、上人を市坂の岩窟にかくして、傷の手當をした。其の鄕に忠吾・忠内といふ兄弟の者が住んで居たが、深く妙法に歸依し、甲斐々々しく看護し、まめやかに事へたので、間もなく傷も平癒した。

九三　俳人一茶

名高い俳人の一茶は、信州上水内郡柏原在の百姓彌五兵衞の長男に生れ、幼名を彌太郎と云ひました。生れて間もなく母に別れたのみならず、佝僂で跛で、醜い顏をして居りましたので、村の子供たちは、いつも彌太郎を仲間はづれにして、遊んでくれません。幼な心にも其のさびしさに堪へかねて、六つの時に、

「我ときてあそべや親のない雀。」

といふ句を作りました。

十六歳の時でありました。彌太郎は江戸へ參りました。學者の家の下僕となつたり、聖堂の小使となつたりして、忙しい務めの間に、そつと講義を立ち聽して、苦學しました。其の熱心によつて、學問はだんだん進みました、殊に俳句がうまくなりました。

彌太郎が二十六歳の時、向島のある家に觀月の句會がありました。彌太郎ははじめて俳句の

會に出たので、隅の方に小さくなつて居りました。一座の人々は、醜い穢い彌太郎の樣子を侮つて、相手にもしませんでした。

人々は順次に句をよみ、いよいよ彌太郎の番になりました。彌太郎は、短冊をとりあげて、

「三日月の」

と書きました。側の者は笑ひ出しました。

「三日月とは何のことだ、今日は十五夜の滿月ではないか。」

「これは素人だわい。」

などと言つて居りました。彌太郎はさらさらと認めて、筆を置きました。短冊には、

「三日月の頃より待ちし今宵かな。」

とありました。一同は「あッ！」と云つて驚きました。

彌太郎は三十二歳の時、鄕里にかへりまして、名を一茶と改めました、俳人一茶の名は、だんだんと名高くなつて來ましたが、名利に淡泊な彼は、いつも赤貧洗ふが如くでありました。

ある日、其の村の名主の嘉右衞門が、一茶の家へとんで來ました。

「彌太郎さん、大へんなことになつてしまつた。直におれと一しよに來てください。加州さまが參勤の途中、此の宿へおとまりになり、お前の風流をきいて、是非一度逢ひたいとおつしやる。」

と申しました。一茶は、

「名主さん。折角ですが、それはことばつていたゞきたい。」

と云ふ。嘉右衛門は、色々とすゝめて、漸く一茶を加州さまのお目通りに伴ひました。

加州百萬石の大名前田侯は、ご機嫌うるはしく、一茶に、

「其の方が一茶か。よく參つた。今日はゆるりと風流の話をきかせて呉れ。」

と仰せられました。一茶は、

「俳諧の道は釋迦や孔子の道と少しも變はりはござりませぬが、今日の俳諧はたゞ十七字を並べるばかりで、まことの道になつては居りませぬ。」

と申し上げました。

「さやうか、それではそちの俳諧はいかゞぢや。」

「山水風月の中に心を置いて詠み出すまことの俳諧でござりまする。先祖の餘祿に生きて居る

やうな人たちには、とてもまことの俳諧はわかりませぬ。」

此の遠慮なき言葉に、一座の人々は色を變へて、心配しました。殿さまの前で先祖の餘祿に生きて居る者に、俳諧の道はわからぬとは思ひ切つたことを云つたものであります。けれども、殿さまは、

「よく申した。聞きしにまさる其の方の意氣、氣に入つたぞ。」

とお歸りの時に、立派な小袖二重を下さいました。一茶はそれを頂戴して御前を退りましたが、歸る道すがら、拜領の小袖は人に與へてしまひました。

「折角の拜領ものを……」と多くの人々は云ひましたが、一茶は「わしは貰ひ物はいらない。」

と云ひながら、一句を吟みました。

「何のその百萬石も笹の露。」

九四　錢屋五兵衛

まだその頃は今日のやうに、外國との交通も開けて居なかつた德川時代の末である。加賀藩で一番大金持の木谷と云ふ商店に、名を五兵衛と呼ぶ十四歳ばかりになる丁稚があつた。五兵衛の父は、同じ藩内の宮の腰と云ふところで廻航業をして居た。

五兵衛は小さい時から外の丁稚や雇人とは違ひ、大膽にして悧巧な少年であつた。どうかして海を渡り、外國との貿易をしたいと毎日考へて居た。しかし、其の頃、德川幕府は勿論加賀藩でも、遠い國に行つて商賣をすることを禁じて居た。

五兵衛が二十九歳の年であつた。加賀藩では嚴禁を解いて、廻航業をいくらか自由にしたので、多年の目的を達するのは此の時であると思ひ、五兵衛は十四五年の長い間奉公をして居た木谷

の家を辭し、船に米穀を澤山積み込んで、北の方の松前に赴き、そこで產出する干青魚を持ち歸り、これを藩内で賣つて、莫大な利益を得た。今まで加賀藩の中には、斯かる遠方まで商賣に出た者がなかつたので、五兵衛の評判は忽ち高まり、木谷の奉公人は、一躍して立派な商人となつた。

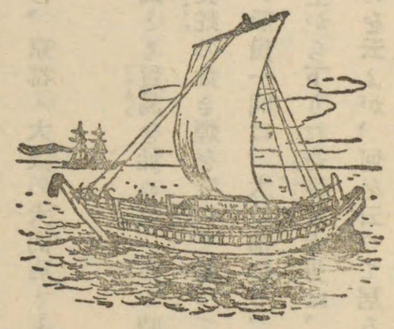
これを初めとして、五兵衛は盛んに船をつくり、日本のあちらこちらへと廻はつて商賣を續けた。商賣は次第に繁昌して、松前・函館・長崎等に支店を出し、京都・大阪の大商店とも親しい取引をするやうになつた。

五兵衛は更に進んで、エトロフに船を進めて、其の地の土民とも貿易を始めた。ある時澤山の品物を船に積んで、エトロウに赴く時、海の上で煙突から長蛇の如き煙を吐いて走つて來る山のやうな大きな船に逢つた。今まで蒸氣船を見たことのない船員一同は、大に怖れて、一生懸命に逃げようとしたが、忽ち追ひ付かれてしまつた。船の上から下りた奇妙な大男は、ボートに乘つてこちらへ漕ぎよせて來た。やがてしきりに何かものを云ふが、何を云つて居るやらさつぱりわからない。けれども手眞似によつて推察すると、あの大きな船まで一寸來てくれと云ふのらしいので、五兵衛は、直に其のボートに乘つて行つて見た。

その船は露西亞の船であつた。船長は大へん喜んで、これから時々此のあたりで會し、海の上で直接に品物を交換しようと云ふ相談が成り立つた。

其の後、五兵衛は、また海の上で、アメリカの船にも逢ひ、朝鮮近海の無人島を貿易場として、毎年日を定め、定期の取引をした。

五兵衛が六十二歳の時であつた。十二人の人夫と共に、エトロフに行く途中で難船し、檣も艪もとられてしまつた。船は波のまにまに漂うて、廣い海の中へ出た。行けども行けども陸のかげさへも見えない。薪がなくなつてしまつたので、一同は生米を嚙んで餓を凌いだ。一日二日とたち、春はくれて夏となり、夏もくれて秋となり、百五十日の間、浪の上を漂うた船は、アメリカのブレイタンといふところへ着いた。そこはサンフランシスコから五里ばかり離れたところであつた。



五兵衛は思ひがけなく米國の地を蹈み、數十日の間滯在して、其の商業のありさまを視察し

米國人と貿易の約束をしてから、便船に乘つて歸國したが、其のあくる年、即ち天保四年に、五兵衛は、米國人の喜ぶ品物を多く買入れて、再び米國に赴き、それを彼の國の品物と交換して歸つた。

五兵衛は幼少の時から、丁稚奉公などをして居て、別に學問のあつた人ではないが、其の一生涯の中には、實に驚ろくべき程の大事業をした。

五兵衛は時勢に率先して、海外貿易に從事し、莫大の富を得たのみならず、藩内の人々のために多くの有益なる事業をなしたが、五兵衛の立身立世を妬む者の奸計に陷つて、獄に投せられ、八十二歳の時あはれにも獄中で病死した。

九五　君平と蘆庵

當時考古學を以て聞えて居た小澤蘆庵の京都の宿所へ、一人の男が訪れて、

「私は下野宇都宮在の蒲生伊三郎と申す者です。日ごろ琴を好みながらも、田舍には良師とてもなく、志を達することが出來かねますから、此の度遙々と當地へ出て參りました。御主人

は天下に知られた妙手と承りましたが、何卒お弟子の中に加はへていたゞきたい。」

と申し入れた。此の伊三郎と云ふのは、有名な蒲生君平のことである。

「しばらくお待ちを願ひたい。」

と取次の者は奥へはいつた。中で蘆庵が聲を高うして、

「琴などは男子の弄ぶべきものではない。若い時は搔きならしたこともあるが、近ごろは打ち摧いて薪に代へた。教授などは平にご免を蒙りたいと申せ。」

と云ふのが聞えた。玄關へ取次の者があらはれると、君平は返事も待たず、

「先生のお言葉はわかりました。もう一言お願ひをして下さい。琴を學びたいと云つたのは、實は戯れです。私は下野の儒者ですが、少し志す所があつて、先生に面會したいと思つて上つたのです。先生のお氣質の俗でないことを承つて居ましたから、紹介もなく突然上りました。是非その由をお傳へ下さい。」

と言つた。蘆庵は面白い客人であると思つて面會した。君平はかねて自分の志して居る山陵志のことを語り、

「是非先生の御援助を仰ぎたい。」

と懇願した。蘆庵はこれを聞いて感じ入り、

「足下はまことに奇特なお方である。當分自分の許に滯在して自由にご研究なさるがよい。」

と、此の一介の書生を厚くもてなした。

それから君平は當分蘆庵の許にあつて、山陵志を著はすために、日々あちらこちらの古陵を尋ね巡つた。夕方歸ると、主人は、自ら風呂を焚いてすゝめた。君平は氣の毒に思つて、これを辭退すると、

「國を思ふ志から、毎日奔走して居られる君の如き處士の勞を慰めることは、私にとつて何よりの喜びだ。」

と云つて、幾日も變らずにこれをつゞけた。

九六　將軍と伍長

後にアメリカの大統領となつたワシントンが、獨立戰爭の時に將軍となつて軍隊を指揮して居た。

ある冬の朝、將軍はたゞ一人で散歩かたがた陣中の視察に出かけた。軍服の上に長い外套を着て居たので、通りかゝりの者もこれが將軍であるとは氣づかなかつた。

將軍があちらこちらと歩いて居る中に、一人の伍長が部下の兵卒に指圖をして重い木材で胸壁をつくらせて居るのを認めた。

將軍はしばらくそれを眺めて居た。木材が重いので兵卒だけではどうしても上へあがらなかつた。然るに、伍長は、

「もつと力を入れろ、もつと力を入れろ。」

とかけ聲をして居るばかりで、少しも手傳をしようとはしなかつた。ワシントンは、直ちに馳け寄つて加勢をした。それが爲めに、大きな木材は難なく胸壁の上にあがつた。兵卒等はみな此の見知らぬ親切な男に禮を云うた。ワシントンは、伍長に向つて、

「君は何故に手傳をしないか。」

と云つた。伍長は傲然として、

「僕は伍長だよ、指圖をして居ればよいのだ。」

と答へた。

「なるほどお前は伍長だつたな。」

と云ひながら、ワシントンは外套を脱いで、

「僕は此の通り將軍だよ。これから若し君の部下の者が、重い材木をあげる時に、力がたりなかつたら、いつでも呼びに來たまへ、手傳つてやるから。」

と其のまゝそこを立ち去つた。伍長は身のおきどころもない程驚ろいて、今にもどんな罰を受けるのかと心配して居たが、ワシントンは別に譴責さへもしなかつた。

九七　セシル・ローズ

植民地の經營者として、祖國のために最も偉大な功勳を立てたのは、英國のセシル・ローズである。

ローズは千八百五十三年に僧侶の子として生れた。宗教事業に從事するつもりであつたが、病身であつたから、養生かたがた十六歳の時に、アフリカのナタルにある兄の許に身を寄せた。

ローヅはナタルに遊んで居る中に、ふと金剛石の採掘を試みたが、意外にも成功して多くの財産をつくつた。其の時から植民地の經營に興味を感じ、遂にこれを以て、自分の天職であると確信するやうになつた。

ローヅは少壯の頃から植民地に渡つた爲めに、十分に教育を受けることが出來なかつたので、金剛石の採掘に成功して、莫大の富を作つてから、教育の足らざることを自覺し、一旦英國へ歸つてオックスフォード大學へ入學した。學校にある間は數多の學生に交つて熱心に勉强し、休暇になるとアフリカへ渡つては事業に沒頭した。其の中に病氣は次第に重くなつて、一時は醫者も絶望した程であつたが、幸にもまた健康を快復した。

ローヅは植民地で成功しても、常に故國のことを忘れなかつた。英國の勢力を植民地の上に發展せしむることに絶えず力を盡した。彼は選ばれてケープ・タウンの議員となつたのを政治的生活の發端とし、遂には内閣に入り、總理大臣の地位に進んだが、此の間に英國のために劃策した所は尠なからざるものであつた。就中、アフリカ植民地全體を英國利權の下に置く第一歩としてエジプトのカイロから、ケープ・タウンまで、アフリカ大陸縱貫鐵道の敷設を計畫したのは、一生の大事業であつた。

ローヅは千九百二年に五十歳で世を去つたが、生前に積んだ多大な資産は惜氣もなく公共事業に寄附した。遺志によつて母校たるオックスフォード大學に寄附した奬學資金の如きは、今日でも幾多の優秀なる人物が其の恩惠に浴して居る。

九八　よるべなき孤兒の爲めに

その一

今から五十年ばかり前のことである。英國のロンドンにベルナルドと云ふ若い醫學校の生徒があつた。情深い人であつて、日曜の晩などには、貧民の兒を集めて讀み書きを教へて居た。

ある寒い晩のことであつた。學校をしまつて歸らうとすると、一人の子どもがストーブの側に立つて居た。

「お前はなぜ歸らないのか？」

とベルナルドが親切にたづねると、其の子はもぢもぢしながら、

「私はおうちがありませぬ。」

と答へた。ベルナルドは不思議に思ひ、

「家がないの？、それではお父さんやお母さんは？」

ときいた。

「お父さんもお母さんも、またお友だちもございません。」

と其の子どもは云ふ。

「それではお前は毎夜どこに寢るのか？」

とベルナルドは又たづねた。

「お巡りさんの目につかないやうに、よその家の軒や、お寺の垣根などに寢るのです。」

と云ふ。ベルナルドは太く驚いて、

「それでは今晩お前の寢る所へ私をつれて行つてくれないか。」

と云ひながら、其の子について歩いた。

その時にはもう十二時を過ぎ、外には身を切るやうな寒い風が吹いて居た。子どもはやがて、眞暗なうす氣味の惡いやうな路次にはいつた。子どもはそこにある高い壁をするすると攀ぢ登つて屋根の上に出た。ベルナルドも續いて登つた。するとその屋根の上には十二から十八

位までの子どもが十人ばかり、足を筧の上に入れ、頭を棟へ向けて、仰向になつて寢て居た。

その子どもの蒼白い顏を、星あかりにすかして眺めた時、ベルナルドははらはらと涙を出した。世にはあはれな子どももあるものだ。同じ人の子でありながら、親の愛も知らず、眠る家もなく、かうした生活をして居る者もある。どうかして此のあはれな子どもを、救つてやりたいものだと云ふ決心が彼の心に湧いた。

それから間もなくベルナルドは一軒の粗末な空屋を借りて、二十五人ばかりの家なし兒を集めて育てた。このことをきいて、多くの情けある人々は、金や品物を寄附した。

二十五人の子どもは間もなく五十人となり、百人となり、三十年目には五萬人となり、家の數も八十軒以上になつた。

ベルナルドは、多くの孤兒を自分の子のやうに可愛がつて育てた。その中から世の中の爲めに働らく立派な人物も澤山出た。

その二

岡山には有名な孤兒院がある。此の孤兒院は、明治二十七八年戰爭以前に、石井十次と云ふ人が始めたのである。

石井氏は岡山醫學校の生徒であつた。ある時、生國もはつきりわからない一人の女が、男の子をつれて岡山へ夫をたづねに來た。ところが其の夫はもう亡くなつて居たので、女は歸る家もなく、途方にくれて居た。同情心の深い石井氏は氣の毒に思つて、親子二人を自分の家に置いて世話をした。其の後、女は子どもを石井氏の所にあづけて再緣した。

一日其の女が子どもをたづねて來た。新調の著物をきて、髪を立派に結ひ、見ちがへるほど綺麗になつて居たから、子どもは最初母だとは氣がつかなかつたが、やがてそれとわかると、抱きついて喜んだ。その時に石井氏はつくづくと感じ、

「世の中にはまだこれより不幸な子どもが澤山あるであらう。どうかして自分はさういふ不幸な子どもの親になつてやりたいものだ。」

と思ひ、いろいろ考へた末に、

「醫者になる人は外にも多くあるが、孤兒の親となる人はない。自分は醫者になる望みをすてて、孤兒院を建てよう。」

と決心して、今まで勉强して居た醫學の本を庭先に積み重ねて、それに油をかけ火をつけて燒きすてゝしまつた。

石井氏が孤兒院を建てると、集まつて來る者がたんだん殖えた。最初は二人三人であつたが、間もなく幾十人といふ多き數に達した。世の中の同情ある人々が、寄附して呉れるお金や米によつて、やつとしのいで居たが、戰爭がはじまると、世の中の人々はそちらの方に氣をとられ、孤兒院などのことは見むきもしなくなつてしまつた。それが爲めに時々食物にさへも窮するに至つた。石井氏はたゞ孤兒のことのみを思ひ、自分には食べずに、子どもにお粥をつくつて與へるといふやうにして、あまりに無理をしたので、重い病氣にかゝつて動けなくなつたこともあつた。

又その頃院内に赤痢が流行して、一日に何人も子どもが死ぬと云ふやうなことがあつた。死んでも葬式をすることが出來ないので、年上の孤兒が小さい兒の死骸を抱いて、墓場に埋めに行く、歸つて來ると、又別の兒が死んで居るといふやうな、目もあてられぬありさまであつた。

されど、石井氏の信念は固かつた。如何なる障害も、その志を奪ふことは出來なかつた。天はいつまでも正しい人を苦しめるものではない。幸に戰爭が終ると、世間の同情が再び孤兒院に集まつて、寄附をする者が非常に多くなつた。非常に澤山の孤兒を收容することが出來た。孤兒の中からは立派な人物も出た。

九九　甲の浦哀話

明治十五年の冬であつた。嵐は甲の浦の沖合を吹き荒んで居た。夜の十時頃である。凄じく吠え渡る怒濤の中に翻弄されて、進退の自由を失つた一隻の帆船があつた。船員はもはや最後の意を決して居た。恰も此の時荒れ狂ふ闇の中に、さゝやかな灯のかげがまたたいた。

「おい灯が見えるぞ。」

と一人の船員は叫んだ。一同は喜び勇んで、艀を降ろし、その灯を目標に漕ぎ寄せた。着いたのは甲の浦の白濱であつた。さゝやかな灯は、そこの濱邊の漁民を相手に、夜鳴うどんを賣る婆さんの行燈の灯であつた。

此の話をきいた其の夜から、甲の浦の庄屋をして居た小川知新氏は、港の堤に篝火を焚いて入港する船の目じるしとなし、航路を安全ならしめたが、此の時から深く燈臺の必要を感じ遂に横濱の燈臺局に依頼して設計し、千三百餘圓の私財を投じて、八角型の燈臺を建設した。竣工したのは明治十七年の二月であつた。

辛うじて燈臺は出來上つたけれども、點燈の雜費や燈油費を自由に支拂ふことが困難であつた。それが爲めに、小川氏は、田畑をはじめ、祖先傳來の財産を盡くそれに投じてしまつた。親族の者は、極力これを諫止したが、あくまでも意志の强い小川氏はきかなかつた。しかし、それがために、一時夫人までも離別せねばならぬことになつた。

幸にも、明治四十年には、燈費徵收令が出て、百石につき十七錢、一噸につき三錢づゝを、入港の船が燈臺へ納めることになつた。甲の浦は土佐の要港で、入港の船も多かつたので、數箇月の中に失つた私財の半を回收することが出來た。

小川氏の功を嫉む者や、燈費の徵收を免れようとする者は、善良な村民に向つて盛んに小川氏を中傷した。村民は彼等の煽動に乘つて小川氏を誤解し、慈善を裝ひ私腹を肥やすものとし、種々の迫害を加へた。小川氏は、多くの金を公共事業に寄附して、其の身の潔白を明かにせられた。

其の後、此の燈臺は、高知縣廳の管轄に移つた。

小川氏は大正七年に急性肺炎にかゝつて永眠せられたが、甲の浦の磯邊に立てる八角型の燈臺は、今も昔と同じく、暗い海に一道の光明を投じて居る。

一〇〇　イエスキリスト

人類に對する最も深い愛の敎へを說いたのは、イエス・クリストである。

イエス・クリストは猶太人である。パレスチナの片ほとりなるガリラヤの小さき町ナザレに生れた。父をヨセフと云ひ、母をマリアと云つた。ヨセフは大工であつた。マリアは心の正しい婦人であつた。

キリストの生ひ立ちのことはよくわからない。

彼が三十歲の頃であつた。ヨルダンの野原に一人の豫言者があらはれて、

「天國は近づけり。人々悔ひ改めよ。」

と說いて、多くの人々に悔悟を促した。これが卽ちバプテスマのヨハネである。

罪となやみに疲れはてゝ、心ひそかに天國にあこがれて居た猶太の人々は、爭つて此の豫言

者の許にあつまり、ヨルダンの流れに入りて洗禮を受けた。

イエスも亦豫言者の許に來て洗禮を受けたが、水から上る時に、

「汝は我が子である。」

と云ふ天の聲をきいて、彼ははじめて自分が神の子であるのを意識した。

イエスは一度びナザレに歸つたが、間もなく故鄕を去つてガリラヤの湖畔なる、カペルナウムの町に來て、多の人々に道を說いた。

人々は集まつて彼の話をきいた。面白い警喩談の中に、深長なる意味のこもつた彼の敎訓は、彼の身邊にあつまる多くの人々を醉はしめ、彼の名聲は忽ち高まつた。

イエスはたゞ說敎をしたのみではなく、病に苦しめる者、惡鬼につかれたる者に同情して、溫い言葉で嚴肅なる訓誡を與へたので、周圍に集まる人々は日每に多く、熱狂せんばかりに彼を崇拜した。

されどイエスの名が高くなるに從つて、彼の敎を妨げんとする者も多くなつた。殊に彼の說敎は、パリサイ、サドカイの徒から甚だしい反感を買つた。彼等は時の政府に向つてイエスをあしざまに纔言した。

イエスが偶〻國都のイエルサレムに乘り込んだ時であつた。遂に捕へられてローマ總督の手に渡された。

法廷に立つたイエスは、少しも憐れみを乞はず、主張を曲げず、自若として救世主たる自信を述べた。

法廷に於ては、律法を廢棄し、神を輕侮する危險人物として、彼に燦殺の刑を宣告した。

兵士等は、イエスに紫色の衣服を着せ、茨の冠をかむらせ、罵り嘲けり、又は鞭うち、「猶太王耶蘇」と記した十字架の上に釘づけにした。かくて、イエスは、遂に、

「我が神、我が神、何故に我を見すて給ふか。」

の一言を殘して、あはれやゴルゴタ丘上の露と消え失せた。

昭和二年二月二十日印刷
昭和二年二月二十五日發行

修養百話 趣味讀本

定價壹圓八拾錢

著作兼發行者 東京市外中野町三六三一 三浦藤作

印刷者 東京市深川區豐洲町百五十七番地 松澤悌三郎

發行所 東京市外中野町中野三六三四 帝國教育會出版部 振替東京六八二八六

【大取次】 東京堂 益文堂 北隆館 東海堂 大東館 上田屋 柳原書店 川瀨書店 菊竹金文堂

版權所有

原田實氏譯

エレン・ケイ

近代の偉大な思想家・教育家たるエレン・ケイ女史の傳記と思想と事業とを最も詳しく、最も明瞭に、最も組織的に紹介した良書である。

本書の原著者は、エレン・ケイ女史の友人で、女史を最もよく理解して居たニストレムハミルトン女史である。

本書の譯者はエレン・ケイの研究者として知名な原田實氏で、譯文の完全と巧妙とに於て他の追從を許さないもの、類例の少ない名譯である。

エレン・ケイ女史の思想が現代の世界に如何なる影響を與へたかといふことは、改めて詳述するまでもない。近代の婦人の中、エレン・ケイ程人類の思想界に大きな波紋を投じたものはない。

エレン・ケイ女史の思想は、たゞ今日の社會を動かしたのみでない。未來永劫に世界の人類を動かす力をもつて居る。

エレン・ケイ女史の生涯に興味を感じ、其の思想に共鳴する人々は勿論、あらゆる文化事業に携はるものは、必ず本書の一卷を座右に備へる必要があります。

四六判二百三十頁
クロース製美本
定價一圓六十錢
送料八錢

附近の書店になければ發行所へ直接御申込下さい

發行所 東京市中野町中野三六三四 振替東京六八二八六 帝國教育會出版部

永久に光を放つ名著

文學博士 澤柳政太郎氏著

ペスタロッチ

澤柳博士の舊著（廣澤氏共著）たる「ペスタロッチ」は、當年の教育者に多大の感激を與へた名著である。此の名著を讀んで發奮興起し、教育事業のために献身的活動の決心をした者が少なくなかつた。教育の神ペスタロッチの生涯を活寫して最も詳密、而かも叙述の筆は極めて雄渾壯重、再讀三讀反覆するに從つて益々味はひを生ずる名文であつた。後年、我が教育界の權威となれる澤柳博士が當年に於て如何に熱烈なペスタロッチの私淑者であつたかも本書によつて知ることが出來る。

本書の刊行以後、ペスタロッチに關する書物も多く出たが、後に出たものは、悉く本書から何等かの暗示を得た。ペスタロッチの高德を慕ふ者は、先づ本書を求めて耽讀した。本書の如きは永久に光を放つ名著と云つてもよい。

本書が絶版になつてから、既に久しい歳月を經た。本書を探しても容易に手に入らないやうになつた。かくの如き名著が世上に影をひそめたことは甚だ遺憾である。依つて、本會出版部では、今回これを再興することにした。

ペスタロッチ逝いて一百年。こゝに不朽の古典的價値を有する此の良書を教育者の座右にすゝめたい。

四六判 美本
紙數三百二十頁
定價二圓四十錢
送料八錢

附近の書店になければ發行所へ直接御申込下さい

發行所 東京市中野町中野三六三四 振替東京六八二八六 帝國教育會出版部

帝國教育會主事
兒童の村小學校長　野口援太郎氏著（新刊）

四六判三百五十頁
上製函入美本

定價金貳圓七拾錢
送料八錢

高等小學校の研究

高等小學校を如何に改善すべきか。これ我が教育界に與へられた最も緊急にして最も重大な問題である。かくの如き大問題をかくの如く徹底的に研究したものは、今日までまだ嘗て出たことがない。當然に出づべくして出なかつた大著述がはじめて茲に生れ來たのである。野口援太郎氏は、人も知れるが如く、實際教育として多年の經驗を有し、嘗ては姫路師範學校長として盛名を馳せ、現在では兒童の村小學校及び城西學園中學を自ら經營して、新教育の實現に努力せる人である。氏はまた常に歐米各國の著書及雜誌を讀み、世界の教育思想及び教育事情に精通せる我が教育界の重鎮である。かくの如く理論的知識と實際的經驗とを双つながら豐富にもてる此の著者にして此の著作あるは、誠に其の人を得たものと云つてよい。或は歐米各國の事情を紹介し、或は多年の實地研究に基づいて、穩健・正確・明瞭・適切な斷案を下したものが即ち本書である。教育關係者は勿論、教育問題を論ずる政治家等にも必讀の要あるものと信ずる。

附近の書店になければ發行所へ直接御申込下さい

發行所　東京市中野町中野三六三四　振替東京六八二八六　帝國教育會出版部

教育講座

此の叢書は、最も深遠な學理を、最も平易な文章にて叙述し、多忙な教職に在る人々に、速く徹底的な知識を授けるのを目的として創刊したものであります。

今日までに左記の四卷を出版しましたが、今後續々刊行の豫定であります。

各篇とも非常な好評を博しました。各學校の教科書、參考書、講習用書として最良の書であるといふので、毎卷ともに各地より多數取りまとめて註文がありました。

第一篇	精神科學派の哲學及教育學說	定價一圓五拾錢	送料八錢
第二篇	解明哲學概論	定價一圓五拾錢	送料八錢
第三篇	西洋哲學小史	定價一圓五拾錢	送料八錢
外篇	倫理學研究者のために	定價一圓八拾錢	送料八錢

附近の書店になければ發行所へ直接御申込下さい

發行所　東京市中野町中野三六三四　振替東京六八二八六　帝國教育會出版部

受驗者・獨學者必讀必備の寶典

三浦藤作氏著（「教育講座」外篇）

新刊

倫理學研究者のために

四六判上製函入　定價一圓八十錢　送料八錢

文檢受檢記等に無責任なるものの多いのを慨し、著者が初學者に對して、最も親切に語られたものである。著者は倫理學に精通せる人、且つ純然たる獨學者である。本書は、何人も及ぶべからざる天下一品の良書にして、倫理學研究者のバイブルである。文檢受驗者は勿論、其の他の者も必讀すべきものである。

目次

一　初めて倫理學を學ばんとする人に
　一　緒言
　二　雜誌其の他の受驗記事に就いて
　三　讀書の方法に就いて
　四　學科の範圍に就いて
　五　參考書に就いて
　六　自分の著書に就いて

二　文檢の修身科に就いて
　一　緒言
　二　文檢受驗の利害
　三　文檢修身科の範圍
　四　倫理學の要點
　五　西洋倫理學史の要點
　六　支那倫理學史の要點
　七　日本倫理學史の要點
　八　國民道德の要點
　九　實踐倫理の參考書と其の讀み方
　一〇　結論

三　文檢修身科の參考書と其の讀み方
　一　緒言
　二　倫理學の參考書と其の讀み方
　三　西洋倫理學史の參考書と其の讀み方
　四　支那倫理學史の參考書と其の讀み方
　五　日本倫理學史の參考書と其の讀み方
　六　國民道德の參考書と其の讀み方

四　文檢受驗當時の回顧
　一　私の文檢受驗
　二　修身科參考書の選擇
　三　法制及經濟科參考書の選擇
　四　參考書の讀み方
　五　修身科の筆答試驗
　六　法制及經濟科の筆答試驗
　七　口述試驗
　八　受驗後の所感

五　倫理研究上に於ける未開の領域

附近の書店になければ發行所へ直接御申込下さい

發行所　東京市中野町中野三六三四　振替東京六八二八六　帝國教育會出版部

珍書として尊重せらるべき出版物

三浦藤作氏著

明治教育史料雜考

著者はかくれた日本文化の研究者である。殊に近世の文化史料を渉獵すること多年、其の根氣よき努力は極めて少數の人のみが知つて居る。本書はまさに湮滅してしまはうとして居る明治教育史の材料中、特に興味のあるものを、毎年四回つゝ發刊しやうとする計畫で、第一冊が漸く出たのである。挿繪の澤山はいつて居る面白いもので、後年になつたらば珍書として取扱はれる種類のものである。

菊判百三十頁　實費一圓二十錢　送料六錢

内容

はしがき
大橋訥菴の「闢邪小言」略傳
學系
「闢邪小言」の内容
ペルリ提督久里濱上陸當時の光景
來航上陸當時の雜觀
ペルリ提督の率ゐる米艦隊の來艦
慶應四年發行の新聞紙
滑稽なる我が兵船の進退と其の驛鬪員
最初の新聞紙
明六社の組織と「明六雜誌」の刊行
明六社制規
明六雜誌の發刊
明六雜誌の内容
明治初年の理化學講演
其の例（一）天變地異
其の例（二）物理訓蒙
其の例（三）越歷新紙
其の例（一）江湖新聞
其の例（二）公私雜報
其の例（三）市政日誌
慶應四年印刷諸新聞雜誌番附
其の例（四）窮理日新發明記事
加藤弘之博士の著書
加藤博士の印象
加藤博士著作目錄
自著に對する感想
ロンドン大學に於ける菊池博士の講演
講演の内容
講演に對する世評
ニューヨーク市に於ける菊池博士の講演
京都市に於ける小學教育の創設
古川正雄氏の繪入知慧の環

直接購讀者は下記へ御申込ありたし

東京市中野町中野三六三四（振替東京六八二八六）
東京府神田區錦町二ノ三（振替東京二五〇一一）

帝國教育會出版部
益文堂書店

民衆藝術夜話

四六判美本
二百五十頁
定價一圓八十錢
送料八錢

趣味の天地に獨自の境地を開拓して進む著者の隨筆隨話數十篇を收む。民話、民謠、民踊、民樂、映畫、演劇等、高級なるものより低級なるものまで、悉く考察して餘すところなし。著者の見識の現はれたる點も少なからず。燈下に親しむ良書として一讀をすゝむ。

三浦藤作氏著

目次

一 民衆藝術と教育
輕視せられて居る教育の一方面
民衆藝術とは何か
民衆藝術の要素
民衆藝術の種類
民衆藝術と教育

二 民衆教化の資料としての日本の物語
物語の性質
日本の物語の特色
日本の物語の內容
民衆教化と日本の物語

三 活動寫眞論
活動寫眞の進歩
活動寫眞の內容
活動寫眞の特徵
活動寫眞に於ける個性
活動寫眞の美感

四 映畫劇論
映畫劇の感化力
映畫劇の性質
現今の映畫劇
映畫劇の諸問題

五 藝術と社會
大南北全集
籠の鳥
發見と構成と表現
フアンの世界
オペラ
民謠の新作
民衆美意識の標準
朝から夜中まで
天保水滸傳
浪花節協會
三宅雪嶺氏の處女作戲曲
俗文藝と無文藝
奇怪な藝術論・教育論
探偵小說
惡逹者
泉鏡花の全集
講談の內容と民謠の歌曲
安中草三
民心を毒するもの
低級な教育的センチメンタリズム
文學史上の白紙時代
似而非惡魔主義
唄の追憶 其の一 子守唄
唄の追憶 其の二 手毬唄
唄の追憶 其の三 機織唄
唄の追憶 其の四 地搗唄
唄の追憶 其の五 祭のはやし
唄の追憶 其の六 源氏節
興味ある一問題
趣味と社會
興味本位の藝術
怪しい藝術教育の流行
國劇の前途
民謠の發生と傳播
劍と血と俠と殘虐
日本の道德史
歷史の虛妄性と小說の眞實性
田舍芝居
殘忍・藝術
懷古趣味
忠治と次郎長
三州俠客
ラヂオの童話

直接購讀者は下記へお申込ありたし

東京市中野町中野三六三四（振替東京六八二八六）
東京市神田區錦町二ノ三（振替東京二五〇一一）

帝國教育會出版部
益文堂書店

558
40